莊子の死生觀

年」で、生に始まつて死に終る。この問題を如何に解決すべきか。莊子はこれを面白く譬へた。若い娘にお嫁に行けと云ふと、愧かしとか厭だとか、何ぢや彼ぢやと駄々を捏ねて、隨分と親を困らせる。が、さて愈々輿入れとなる。行くときには泣いて行つた其の娘が、行て見ると思つた程辛らくもなく、馴れるに從つて嬉しいことばかり、斯麼位ならモット早う來ればよ好かつたに、何故これが氣が附かなかつたかと後悔するやうなもので、この世に居る中は、死んだ先きは何うだとか、斯うだとか氣を揉んで居るが、行つて見ると存外好い處かも知れぬ。だから死と云ふことは決して厭ふに及ばない。

と云つた。斯う安心が出來れば、不去不來の自由の境界に住することが出來る。

四〇　傳說の一休

一　尊き父

南朝の哀史七十年、楠、新田なんどの忠臣義士が花の如く、吉野の宮を飾りしも、蟾て天津日嗣の三種の神器は、恙無く後小松天皇に讓られて、榮ゆる天下一統の御代となつた後三年、

一休の誕生

人は足利の中世を謠ふ應永元年、押窮つた十二月の二十八日に、一代の奇才一休宗純は、勇ましくも法の御藏を蹴破つて、この娑婆に孤々の聲を擧げた。處は京都の今出川、使ふ產湯は加茂川の、水に晒らした玉の肌と云ひ傳へられて居る。

伊豫の局

御代しろしめす後小松帝の朝延に、久しく宮仕へして居る伊豫の局は、花も耻らふ顏に、三千の寵愛を一身に集め、人も羨む身の榮華に、何時しか貴ごとなき御方の御胤を宿し、暫しの暇を乞うて宮を下つた。春や夏、十月經つて滿ち來る潮と諸共に、おぎやァと生れたは玉のやうな男の子。これが即ち一休である。されば一休こそは正に後小松帝の御落胤であると云ふが、帝はその時寶算正に十八歳にあらせらるゝ。

千菊丸

さても自ら具はる氣高き人品、その子の名を千菊丸と呼んだ。或る一說には菊麿と云うたとも云ふ。高橋三位滿實卿の妹、玉江といふを乳母として育てられた。まだ幼い頃から、溢るゝばかりの天禀の奇才は發揮された。

乳母の玉江

乳母は性來の醜貌、色はきび〳〵黑いので「おくろ」と綽名されて居つた。無邪氣な千菊丸は何時しか夫れを聽き覺えて、おくろ〳〵と呼んでゐた。玉江はそれを聽くたびに餘りのあど

雪の朝

鷹も歌を詠む

導き父

けなさに、若様！　と抱き締めて頬摩りした。

千菊丸が七つの年、雪の降つた冬の朝。今しがたから悪戯に耽つてゐたのを玉江が若様と呼んで「左様に悪戯遊ばしては……おゝお幾歳におなり遊ばすや」と制すれば「呆けた奴ぢやな、其方は鷹が生れてから手鑒にかけて育てながら、鷹の齢を知らなぬとは……」「オホ、、然う仰せ遊ばしては……」と笑ひつゝ「まアお聞遊ばせや、昔、菅原道眞公とやらは、お年七つのその時に、丁度、今日のやうな雪降る日、お側の小督と申すものを御覽になり、お歌をお詠み遊ばした。そのお歌は

降る雪が綿々〳〵なれば手にためて
小督が袖につめたくぞ思ふ

と云ふのでございます。貴方もモウ七歳……何時までも悪戯ばかり遊ばさず、學問手習ひ歌詠みなどの御稽古遊ばせや」とすかせば、「鷹も歌を詠む。道眞公の歌モ一度聞かせて呉れい」と優しく宣ふに、「降る雪が綿々〳〵なれば手にためて……」と、聽いて少時、小首を傾げてゐ給ひしが、「うむ出來た〳〵、斯うぢや」とて

降る雪が白粉なれば手にときて
おくろが顔にぬりたくぞ思ふ

と聽いて玉江も吃驚。お附の女中も顔見合せ、さても〳〵と驚いた。

二　母の行衛

岩清水八幡

何で麿には母様無い

彌生半の花盛り、暖い春の日を幸ひに、千菊丸は岩清水八幡へ參詣とあつてお供は乳母玉江を初め腰元數多。

表門で乘物を降りて石疊を通つて行くと、乳飲兒を抱いたり、嬰兒を背負つた女乞食、ゾロ〳〵と側へ遣つて來た。千菊丸は目敏くそれを見て、「乳母、あれは何ぢや」との問ひに、玉江は驚いて「あれは乞食と申しまして、往來の人に一紙半錢の袖乞ひをする非人で御座ります」と答ふれば、千菊丸は何時しか小き兩眼に涙の露を宿し、「乳母非人乞食さへ彼のやうに母様あるに、何で麿には母様無い……」玉江は胸も強り裂けるばかり、辛つと心を押沈め、左あらぬ體に「こゝは道路なれば、お館へお歸り遊ばした上、とッくりとお話し申しませう」と云つた

東福寺の傳道

が劫々肯かない。玉江は據なく〳〵も「御母君は若樣御誕生の後、程もなく冥途へお越し遊ばしました……」「その冥途と云ふは」「……極樂淨土でございます」「おゝその極樂淨土とやらへ行つて、母君に合はせて呉れい……」「その極樂は、遠い十萬億土……乳母には案内が出來かねます。」「出來ぬとは……」「いや其の御案内は、今、京都に名高い三名僧、東福寺、妙心寺、大德寺の御住持方にお願ひ申せば、屹度出來まする」と云へば「さらば東福寺へ參らう」と駄々捏ねた。

母に會ひたい

八幡宮の參詣もそこ〳〵にして、その足で東福寺に行き、住職傳道にお目通りをすると、「麿は母に會ひたい、極樂淨土へ案内をして呉れ」との賴みの言葉、傳道は聽いて驚き、「それはそれは殊勝なお心。御案内申したいなれど、それは又遠い處、拙僧は老年のことにて思束なし。今、紫野大德寺の養叟禪師は學德兼備の高僧、このお方にお尋ねなされよ」との勸め、然らばと直ぐ又た紫野大德寺へ赴いた。

大德寺の養叟禪師

養叟禪師にお目にかゝり、復た極樂へ案内して呉れと賴まれる。「おゝ夫れはお易いこと、然し極樂へ參るには、早く出家得度遊ばして、長く行德法德をお積みにならねばなりませぬ」と云はるれば「おゝさらば今より出家せよ」と、制めても肯かれぬ頑是ない心に、玉江初め一同のものは一先づ館へ立歸つた。

師匠と弟子

悧怜とは云ひながら子供のこと、そこにあつた菓子取つて「これは不味い、モット美味いのを持て」と我まゝ氣儘。禪師は夫れをたしなめて「佛門にお入り遊ばす上からは、拙僧は師匠、其方は弟子……母君に會ひたいと思召すならば、先づ我まゝ氣まゝを愼しんで、師匠大事に敎を守り、强い行德法德を積まねばなりませぬ……それが出來ねば、サッサとお館へお歸り遊ばせよ」と云はれて千菊丸は楓のやうな兩手を突き、「否々、お言葉を守ります」と、打つて變つた溫順しさに、三日經つても四日經つても歸らうとは云はない。

出家得度

右の趣を賢き邊へ奏上に及ぶと、千菊丸の意に任せよとの許しがあつて、改めて養叟禪師を師匠と賴んで、愈々出家得度した。

三　禪と念佛

一休の母伊豫の局は、一休が誕生の後、間もなく不歸の客となつたと云ふが、然し又斯う云

浄土教の信者

ふ話も傳へられて居る。

伊豫の局は熱心な浄土教の信者であつた。一休が法語なんど書いて送り、又は時折、坐禪の話をしても、唯だ朝暮念佛のみ申されてゐた。一休が或る時、母を訪れての物語に、

禪と念佛の異同

「母上、念佛を申しても佛にならせ給ふことは、更に疑ひは御座らぬが、物に譬へて申さば、母上がこの御館から一休の庵室へお越し遊ばさる時、うか〳〵歩み給うても、何の苦もなく我が庵室に入らせ給ふ。處が田舍の人が一休の庵室に參るには所々にて尋ねて參らねばならぬ、何れは參るので御座るから、更に支障はなけれども、その尋ね當るまでの迷ひは、なか〳〵容易のものでは御座らぬ、去れば我が申し上ることを御聞き下され」とこま〴〵の話に母上は「然らば何がな好き工夫を申されよ」と云はれたので一休は、『目なしどち〳〵聲についてましませ』この外は御座りませぬ」と答へた。母君は心に猛省される處があつてか、「我が身はいかなる者ぞと申されたとて、知らぬことが申されようか」と云はれた。知らぬことは云へぬの一語は、確に權威ある言葉である。正にこゝに禪的好商量がある。一休が「去ればこそ、知らぬを咎むる人も知らぬので御座る」と云ふや否や母君は、「然らば釋迦や彌陀は用なきものか」と

知らぬことは云へぬ

釋迦や彌陀は用らぬか

更に一歩踏み込んで問はれた。釋迦や彌陀が手倚りになつたり、釋迦や彌陀が前にチラ付くやうでは駄目である。釋迦や彌陀の五臟六腑を喰ひ破つて、その頂顱に超然として卓立するときに初めて自己の光明が蓋天蓋地である。故に一休は「如何にも無くて宜しいので御座る」とキッパリ答へた。

安心の歌問答

母君の心の喜びは如何ばかりであつたらう。正に母君の考への通りで御座ると、第一關の透過を證明したのである、即ち心事了得せられた。茲に於て禪と念佛の一致を見たのである。母君は

いへばいはず云はねば胸が騒がれて
おもはぬ先や佛なるらん

と、さら〳〵と一首の歌を記し、「これは如何に」と更に問はれた。一休は繰返し繰返し詠んで、ハタと手を拍つて「如何にも〳〵、そのお心が大切で御座ります」と云ひもあへず、

今ははや心にかゝる雲もなし
月も入るべき山路なければ

無念無想の大安樂

と返歌して、「母上の御信念、一休も誠に安心致して御座る」と喜んだ。

釋迦や彌陀の用なき境界は、即ち是れ心にかゝ雲もないのである。更に月も入るべき山路なきに至つて、無念、無想、無心の大安樂境に到るのであつて、最早や迷悟、凡聖の論量を超越して居るのである。

この一條の問答に依れば、母君伊豫の局は實に大悟徹底の大修行者であつた。恰も是れうかうかと歩みつゝ、何の苦もなく一休の庵室に入らせられたのである。

四　釋迦を奴に

母の手紙

釋迦達磨をも奴とせよ

一休の母に就ては猶ほ語るべき逸話がある。一休の母が臨終の間際、

我事、今婆婆の緣相盡き、無爲の都に赴き候、お身出家に成りたまひて佛性の見を磨き、其の眼より、我等地獄に落つるか、落ちざるか、不斷添ふか添はざるかを見たまふべし、釋迦達磨をも奴と爲したまふほどの、人と成りたまひ候へば、俗にても苦るしからず候。佛、四十餘年說法し給ひ、終に一字不說とのたまひし上は、我と見、我と悟るが肝要に候。左れば何事も忘想するなかれ、あなかしこ

九月上旬　千菊丸どのえ

くそ蟲同じ人

かへす〳〵も、方便の說をのみ守るの人は、くそ蟲と同じに候、八萬の諸聖敎をよみても、佛性の見をみがゝずむば、此の文ほどのことも、解し難かるべし。

これとてもかりそめならぬ別れては

かたみとも見よ水ぐきのあと

と、こま〳〵と認めて有難い敎訓を送られた。

譯機と愛

峻峭なる禪的識見の堂々たる大文章に、搗てゝ加へて可憐なる我が子を警策する溫かい親の情、奇才なる一休は幾度かこれを讀み、幾度か泣き且つ感激したであらう。

是れに由て之れを觀れば、母なる人は夙に大悟徹抵して居られたのである。即ち「釋迦達磨をも奴となしたまふほどの、人となりたまひ候へば、俗にても苦しからず候」と云ふに至つては、超然として獨立の意氣があつて、而も我が子を誠しむるの威と、我が子を愛するの情と

不生不死の身

心の出家

が溢れ、更に又、形の出家や身の出家ではなく、母の喜ぶは心の出家であるぞよやと自由に擒縱して居る。且又た「佛四十餘年說法し玉ひ、終に一字不說とのたまひし上は」とて、禪の第一義が正に不立文字、敎外別傳なることを示して、速に閑葛藤を截斷して常に如是經を轉ずる活衲僧たれと誡めて、即ち又た「我と見、我と悟るが肝要に候、左れば何事も妄想するなかれ」と、好箇の佛殿に佛あることを說き、自己の光明、蓋天蓋地であるから、徒らに自家の坐牀を忘却して、漫りに他國の塵境に去來してはならぬと訓へ、莫妄想と更に頂門に一針を打つたのである。一休たる者、豈に感奮興起せざるを得んやだ。

妄想すること莫れ

一大事因緣

加之、「八萬の諸聖敎をよみても、佛性の見をみがゝずむば、此の文ほどのことも、解し難かるべし」とて、八萬の聖敎は唯是れ門を敲くの瓦、月を標すの指なることを云つて、直に佛性の徹見を以て、即ち出家の一大事因緣であると、繰返して誡めたのである。

一休を生んだのは此の母である。而も臨終の敎誨、此の如く深切悲痛を極めて居る。一休は遺物の一通を釋尊が沙羅雙樹林の遺敎經として、肌身につけて朝な夕なに心に讀み、縱ひ日は冷やかなるべく、月は熱からしむべくとも、この敎に變りないことを堅く信じた。即ち一休をして一休たらしめたも亦この母である。然れば正にこの母にして此の子ありと云ふべきか。

この母にしてこの子あり

母が臨終の此の手紙を受取つたのは、一休が正に十一才の時であると云ふ。これに依ると其の母は、一休が生れて間もなく亡くなつたのではない。この手紙と前の問答とに依つて、一休の母は此の頃まで存命であつたことが認められる。而して玉江なる女は、乳母であつたのである。

五　有漏路と無漏路

歌自慢の清兵衛

千草丸は剃髮して、名を宗純と改め、道號を一休と呼んだ。

折しも降りつゞく五月雨に、深院の寂寞を破つて庭に營つる梅子の聲。一休は恍然として無想の境に入り、悠然として詩趣に耽つた。處へ、「どうも鬱陶しう御座る、一休樣お出でか」と遣つて來たのは、日頃から和歌自慢の織物屋の隱居淸兵衛であつた。淸兵衛は出された薄茶を啜つて「時に一休樣、今日の雨は又た格別の趣……何かお出來になりましたか」と風流な話に、一休も「御同樣に多情な雨……何か一つ纏めたいと存じて居るが……」と、筆を片手に取

上げて、暫し庭を籠むる煙のやうな雨を眺めてゐたが、軈て半紙を展べて書いた一首、

有漏路より無漏路に歸る一休み
　雨ふらばふれ風ふかばふけ

と示した。清兵衛は靜かに繰返し〳〵詠んだ。暫し小首を傾げてゐたが「この有漏路より無漏路に歸る……の有漏と無漏、この意味を恐れ入りますがお聞せ下さい」と云つたが、一休はニヤ〳〵笑つたまゝ答へなかつた。と思ふ間に、側にあつた小さい拂子を取つて、突然に清兵衛の顏をズルリと撫でた。

有漏と無漏

清兵衛は驚き後へ退いて「何を遊ばします?!」と云へば、一休は呵々笑ひつゝ「否、何も致さぬ顏を撫でたばかり……其方は今、拙衲が顏を撫でたに就いて何と思召されたか」「イヤ何とも思ひ申さぬ……なれど一寸驚きました」と云へば一休はウムと點き、「その何とも思ひ浮べられざりし處が、即ち無漏路……シテ何事かと驚かれしが有漏路で御座る。サア有漏と無漏、御合點な參りしか」と云はれて、清兵衛ハッと小手を拍ち、「これは恐れ入りました。如何にも無心であるところが無漏路で、ハッと思つたところが有漏路とは……さても〳〵、清兵衛もお蔭

無心と有心

で悟を授かりました。して又その雨降らば降れ、風吹かば吹けとのお心は……」と聞へば、「即ち有漏路より無漏路に歸るは、ホンの僅かで一休ぢや、元より休みのその間なれば、雨が降らうと風吹かうと、決して厭ひ嫌ひは致さぬとの心持……」と聞いて清兵衛は兩手を突き、「おゝお蔭さまで全然分りました一休様のお心……」と、喜びつゝ思案してゐたが、軈て筆取り上げて

有漏路無漏路一休みぞと聞くときは
　十萬億土寸さきと知る

と詠んで出した。一休ハッタと小膝を叩き、「おゝ清兵衛どの出かされた〳〵、斯う悟られては成佛得脫、疑ひなし。これこそ誠の悟で御座る」と頻に感嘆して喜んだ。

成佛得脫疑ひなし

これが一休の名の說名であつて、而も一休が一代八十八年の應化も、亦た此の外には出なかつた。即ち一休は、自分の受用三昧を歌つたのである。されば有漏路とは煩惱の此岸、娑婆で、無漏路とは涅槃の彼岸である。即ち迷と悟、衆生と佛である。この間を自由に往來するが即ち一休みであるから、雨が降れば雨で風流、風が吹けば風で安樂、何の心を痛め、思を勞する

一休の自受用三昧

佛を抱いて起き佛を抱いて眠る

ことがあらうや。この心あつてこそ日々是れ好日の活消息があつて、而も朝々、佛を抱いて起き、夜々、佛を包いて眠るのである。茲に到つて富貴も淫すること能はず、威武も屈することも能はざる大丈夫たることが出來る。一休は、その名の如くその面目が茲に躍如として居る。

六　滿月無邊

栴檀は雙葉より香し

正月の鏡餅

一休の飄逸奇才な逸話は、多く少年時代に傳へられて居る。これ元より天資顯脱の然らしむる處で、栴檀は雙葉より香ばしく、蛇は寸にして天に登るの兆あるものである。

頃しも師走の末の方、何處も同じ年を迎ふるの急がしさ、一休が大德寺に留守居をしてゐると檀家から御佛前へと屆けた正月の鏡餅一重。まだ搗き立ての軟らかく、秘と觸つて見れば暖かい。如何にも美味さうである。一休は子供心の面白半分に、竊と其の片端を缺き取つて、跡をそれとなく直したが、如何せん目に立つ凸凹、そのまゝ一休は知らぬ顏して居つた。

軈て歸つて來た師匠の養叟禪師。一休は夫れへ出て「これは先刻、檀家の某より御佛前へと持つて參りました」と出す鏡餅。見れば其の片端が三日月形に缺けて居るので、養叟禪師も

破片何れの處に在るか

釣絲を垂れた

不審に思つた。一休は、御師匠は何と云はるゝかと、心におづ〳〵しつゝ小さい兩手を膝に置いて差控へた。禪師は軈て「滿月無邊、破片、何れの處に在る」と、大聲疾呼された。即ち滿月は元より圓滿で、缺くることのあるべき筈はない。今この餅も滿月同樣、まん圓くして缺けて居る筈はない。それにも關はらず片端が缺けて居るのは何事ぢや、さアその破片は何うしたのぢやと問はれた。

これは平生から已に一休の奇才を認めて居る禪師が、今この鏡餅の缺けて居るのを平氣で出すのは、定めし何か考へて來たのだらうと思つたから、更に夫れを試めして見ようと、餌を付けて釣絲を垂れたのである　掛つて見るは小さい鮒か、大きい鯉か、それは一休の返答如何にある。

すると一休は、ニタ〳〵と笑ひながら更に臆する色もなく、平氣を裝うて如何にも「滿月は無邊で御座る。無邊なればこそ滿月で御座る」と答へ、已に滿月と仰有つた上は、彼此の詮議立ては御無用であると冷かしたのである。が、禪師もさる者、そんな生意氣なことを云つたとて、默つては居られない。更に言葉を勵まして、「然らば此の破片は何處にか無ければならぬ筈」と、

又もこの破片を出せと追及された。

一休も斯うなつては絶體絶命。すッかり内兜を見透されたものだから、愚圖々々してゐては却て危險いと、早速、機轉をきかせて、「さゝ仰せの通りその破片は折からの浮雲に蔽はれて、御師匠様のお目に入りませぬが、唯今私がその浮雲を掻き退けて、すッかり御覽に入れませう」と云ひつゝ、法衣の袖から件の餅の破片を出した。

浮雲に蔽はれた

養叟禪師は餘りに洒脫なる一休の奇才に、ほと〳〵感じ入られて覺えず微笑を浮べ、「おゝ雲が晴れて滿月が出た〳〵」と更に言葉を改めて一休に向ひ、「其方は此の餅欲しさに缺いたのかと云はるれば、一休は何の飾氣もなく、「如何にも欲しう御座る、なれど私に下されしものならねば、如何とも致し難う御座る」と答ふれば、禪師は又「然らば何故あつて、この滿月の片端を殊更に時ならぬ浮雲に匿したか、その次第承まはらう」と問はれた。一休は「別段に改まりたる仔細と申しては御座りませぬ、餘りに美事なる餅なるより、不圖思はず知らず匿くしたので御座いました……然るに面白き御師匠様のお問ひに、つひ失禮ながら、雲に蔽はれてとお答へ申したので御座ります」との言葉に、禪師は倍々其の才智に感嘆せられ、さても〳〵當

雪が晴れて月が出た

意即妙の答話振、今改めて褒美とし、その餅をとらするぞと、一休に與へられた。

斯くと聽いた一山の大衆達、さても〳〵凡人ならぬ一休様、今にも大した名僧大知識にならるであらうと、何れも恐れ且つ敬ふこと一通りでなかつた。去りながら一休は敬まはるゝほど謙遜にして、少しも驕り慢る色もなく能く習ひ能く從うて學問修業するので、メキ〳〵と上達するばかり。それが又一山大衆達の大なる勵みとなつて、何れも參禪辨道に精出した。

凡人ならぬ一休

七　口と皮

或る夜のこと、「本堂のお燈明を消して來い」と云はるるまゝに、一休はスタ〳〵本堂へ行つたと思ふまに、須彌檀に軀け上つて、フッ……フッ……と口で吹き消した。

これを御覽になつて養叟禪師、暫らく經つてから、そ知らぬ體で一休をお呼びになつた。それと氣付かぬ一休は、何事であるかと氣使ひつゝ方丈へ通つた。「御用事は……」と敷居の外に頭を下げた。「近ろ〳〵」の言葉に一休は中へ入つた。禪師は、眉宇の間に溢るゝ一休の奇才を心竊に感じつゝ、左あらぬ體に、「其方、今しがた本堂のお燈明を消された……見れば口でフ

燈明を吹き消した

口は諸々の不淨を食ふもの

お經を讀むこと叶はぬ筈

ッ……フッ……と消して居つたが、あれは以ての外である。口は諸々の不淨を食ふもの、その口にて吹き消すは勿體ない……この位のことは、今さら彼れ此れと申さずとも、其方は能く辨へてゐられうに……と云ひつゝ流石の一休も恐れ入りましたと謝まることと思ひの外、此方は一休、何か思ひ出したやうに、突然、「御師匠様、お經を讀んでは可けませぬか」と問うた。

禪師は、異なことを問ふ奴ぢや、又た何を智慧袋を絞り居つたぞと思ひつゝ、それは又た何故ぢや」と、問ひ返された。一休は、こゝぞとばかりに一と膝繰り出して、「唯今承はりますれば、口は諸々の不淨を食べる……と、されば其の不淨の口にて、佛前に尊きお經を讀むことも叶はぬ筈……お經は何で讀みますか」と問ひつめた。禪師は何時もながらの一休が頓智、又しても〳〵、偉いことを云ひよるはと思つたが、然し「何を申すか、お經は口で讀まいで何んで讀む……愚なことを申すな」と叱するが如くに云つた。一休は却て此處ぞと云ふ意氣込みで、「左樣なれば御師匠樣、尊いお經を讀む口で、佛前の燈明を吹き消しても、何の差支も御座りますまい……」燈明吹き消して惡ければ、お經を讀むも惡からう。お經を讀んで差支へなくば、燈明吹き消しても善いで御座らう、さア善いか、惡いか……惡いか、善いか、御返答は……と詰め寄つた。

無邪氣で豁達である

西陣織の元祖

彼の爺さんの來ない工夫

道理に適つた一言に、禪師もそのまゝ默つて後を迫められなかつた。

平生は柔順で能く使命を守る一休も、思はぬ問題に逢着しては、才氣煥發して縱横無盡に商量して居る。然しその爲ること作すこと、何れも無邪氣で豁達である、少しも惡氣がないこゝが又た一休の面白い處である。

養叟禪師の許へ、機屋竺齋と云ふ町人で風流氣の男が屢々遊びに來る。母は長崎の生れ父は和蘭人で、その父が和蘭へ歸る時に、錦を織ることの口傳を受けたために、軈て竺齋は京都に上つて機屋を開業した。これが西陣織の元祖だと云ふことである。竺齋は碁も打てば茶も遣る。花も生ければ歌も遣る、而して坐禪を少しばかり嚙つた。從つて來れば必ず永くなる。永くなれば側の者が大に迷惑する。竺齋の顏を見ると、又か……と顏を顰めるやうになつた。竺齋が來たが最後、箒立てゝも、下駄にお灸を點ずても仲々歸らない。

或日、若い坊さん達が寄合つた時、竺齋の話が出て、一つ彼の爺さんの來ないやうに善い工夫はないかと相談した。斯う云ふことには格別智慧の優れて居る一休は默つて聽いてゐた。「一

四つ足の類入るべからず

休どの、如何で御座る」と云はれた時、「お粥に潰け物では好い智慧も出ませぬでな」と云はぬばかりの顔付で、暫し考へてゐたが、軈て打ち點頭きつゝ微笑んだ。

その翌日、一休は、美濃紙を三四枚續いで、筆太に「魚鳥は申すに及ばず、四つ足の皮類一切門内に入るべからず」と認めて、これを大徳寺の表門へ、ピタリと貼り付けた。

深い計畫の有らうとは元より知らぬ竺齋、今日も亦相變らず遣つて來ると、この貼り紙、魚鳥は申すに及ばず……何のことか解らないが、何れ一休どのが人を困らせようと遣り居つたはと思ひつゝ玄關へ來た。

貼紙を御覽になつたか

「爺さん來たな」と、一休は夫れへ出てあゝ若し〳〵竺齋さん、能くお越しになりました……併し貴下は、門前の貼り紙にお目が止りませんで御座いましたか」と問へば、竺齋は、小坊主、出て來たなと心に思ひつゝ「おゝ貼り紙を確と見て參つた……シテ夫れが如何で御座る」と云へば、一休は「あの貼り紙を御覽になつた上は、この門内に御入りあること相成るまじき筈……」と、威儀を正して云へば、竺齋は「何故あつて拙者が門内へ、入ること相成らぬか……その仔細な承まはらう」と云へば、一休は此處ぞと、「如何に竺齋どのお聞き召され。貴殿には常々身體が冷えるからとて、不淨の獸の皮を腰へ巻いて御座るではないか……こゝは殺生禁斷の三寶道場、清淨無垢の修業寺、獸の皮を身につけて入るとは、是れ佛戒を犯すと云ふもの、左るによつて彼の貼紙御覽になつた上は、門内へ入ること相成まじき筈……さア竺齋どの、如何で御座る」と言ひ寄つた。竺齋、聽くよりカラ〳〵と笑ひ、「これは異なこと仰せらるゝかな、獸の皮がお寺へ入ること相成らぬとな、アハ、、、……然らば本堂にある彼の太鼓、何故あつて備へ置かるゝか、太鼓は是れ獸の皮、それを御承知御座らぬか……さア一休どの、如何々〳〵」と得意顔に問ひ返へした。「……」流石の一休も返答に困つて無言でゐたが、何思ひけんバタ〳〵と走つて庫裏の方へ行つた。竺齋はその後姿を見送つて、「怜悧とは云ひ條、何を云うても未だ子供ぢや」と言ひ殘し、スタ〳〵と方丈へ行つた。

殺生禁斷の三寶道場

太鼓は是れ獸の皮

竺齋が方丈の廊下に差掛つた時、後から手ごろの棒持つて摺り寄つた一休は、竺齋の腰のあたり目がけて、二つ三つ續けさまにシタ、カ打つた。愕いたは竺齋何奴だと振向けば、これはしたり一休だ、竺齋はハッタと睨み付けて、「誰かと思へば一休、事もあらうに棒を持て人を打つとは！」と、餘りのことに怒りの眼を光らせば、一休は冷やかに笑ひつゝ「竺齋どの、左様

覿面の佛罰

長坐に氣が付いた

に怒らるゝな……太鼓は獸の皮なれば、日に何度となく佛罰を蒙つて叩かれます、今、其方の皮も、覿面の佛罰で打たれたので御座る。愚圖々々仰有れば猶ほこの上に佛罰が當りますぞ」と、持つた棒を振り上げたので竺齋も、「まア〳〵お待ち下さい、これは何うも某が不心得……」と深く謝つた。

竺齋も自分ながらに何時も長坐に氣が付いて、それからは大に慎しんだと云ふが、更に又た一休の奇才に惚れ込んで、始終、一休の言動に注意した。のみならず、自分には時折、難かしい問題を考へ出して來ては、一休の才智を試してゐた。而して大德寺の小僧一休の名は、啻に大德寺山内のみならず、廣い洛中洛外にまで及んで、今は其の名を知らぬものも無いやうになつた。

八　お椀と橋

竺齋は今日こそ一休を困らせて遣らうと胸に計畫んで、養叟禪師に是非とも一休をお伴れ下さるやうと請待した。

蓋を取らずに召し食れ

蓋を取らずにお取替へを

心を籠めた欵待に、禪師も殊の外喜ばれた。時に竺齋は形を正して一休に向ひ「貴僧の御發明は、竺齋、先日の太鼓の一條で、今さらながら感服致して御座る。就ては一休どの、そのお椀の蓋を取らず、中なる御飯を召し食られよ」と、無法な問題を持ち出した。左樣なことは迚も出來ませぬと云ふかと思ひの外、敗けぬ氣の一休は別に困つた樣子も見せず、暫し思案に暮れてゐたが、稍あつて「宜しう御座る、一つ工夫な仕らう」と、夫れより二言三言、世間話に時を移してゐたが、軈て「あゝこれはしたり、誠に申譯のないこと致して御座る、餘りお話に身が入り申して、折角のお汁がすッかり冷えました」と、汁椀に手を添へながら當惑の體を示した。

圖らるゝとは露知らぬ竺齋が、「然らばお熱いのとお取り替へ申しませうか」と云ふがまゝに、「左樣されば脇手ながら、取り替へて貰ひませう」と、出せば竺齋は盆に載せて立たうとするを引止めて、「これ〳〵竺齋どの、何うかその蓋を取らずにお取り替のほどを願ひたう存じます」と云ふに、竺齋ハッと氣が附いて「これは唯今のお答話……イヤ早や手品使ひならねば出來申さぬ」と平服すれば一休は言葉を改め、「蓋を取らずに中なる御飯を食べよとは、出來ざること

を人に強ゆる愚なこと、これ人たる道に反くことなり。無理難題も道理に適はずば、痴人の寝語に異ならず、以後は篤とお慎しみあつて然るべし」と云はれて、竺齋は又々遣られたと恐れ入つた。

このはしとほるべからず

一休が師匠の養叟禪師と伴僧して、何處かへ法事に行つた。その行方に掛つた一つの橋。渡らうとすると一本の建札がある。見れば假名文字柔しく「このはしとほるべからず」とある。禪師は、こゝが通られねば、廻り路をしなければならぬので、これは〳〵とほとんど困り果て居られる。これを見た一休は「否々、構ひませぬ、通りませう」と云ふので禪師は驚き、「左様な横着い事しては相成らぬ、斯うして建札を見た上は、これを守るのが道である」と誡められた。一休は靜にそれを聽き終つて、「御師匠様、私が通らうと申しますのは、この建札があるからで御座います」と云ふに、禪師は呆れて居られると。一休は「御師匠様はこれを何とお讀み遊ばされた。このはし通るべからずとは、眞中を通れとあつて、片端を通るなと云ふことで御座います……左れば眞中をズン〳〵通りませう」と云はれて、禪師はハタと手を拍つて、「それとは更に氣が付かなかつた」と喜びつゝ、その橋を通られた。

眞中を通りませう

小さい鐵槌

一休の奇才は正に此の如く、物として應ぜずと云ふことなく、事とし通ぜずと云ふことない有様で、知るも知らざるも才智を賞め嘆へぬものはなかつた。されば當時の名人、風流人、物知りなど云ふ人々は、何れも大德寺の門を潜つて、一休の小さい鐵槌に打たれたのであつた。

一休が十六歳の折に、師匠の養叟禪師は、拙僧も最早や老衰致した故に、うるさい寺務に關係はるは難儀だから隱居したい。就ては後席は一休に讓りたいが、何を云うてもまだ十六歳の若年もの……如何致したら宜からうと、東福寺の傳道禪師とも話しされたことがあつたので、養叟禪師は或る日一休を東福寺へ使はされた。

東福寺へ使者

一休が來たと聽いた傳道禪師は、直に大書院に通し、坐蒲團、火鉢、高茶臺。尊い禮儀を盡さるゝのみか、禪師も自ら威儀を具して恭しく使の言葉を聽かれた。東福寺一山の大衆は、元より大德寺の一休と其の名は聽いて居れど、まだ僧位も低い一休小僧と思つて居るに、傳道禪師の欵待振に何事ぞと怪しんだ。後にいろ〳〵深つて見て漸く知つた。それは、禪師は一休が後小松帝の御落胤であることを知つて居られたから、特に敬意を拂はれたのであると。

九　東山殿

一休は若い中は、東は關東から北は越後路まで、處々方々と行脚して居つた。後年、大德寺内眞殊庵に居つた頃、彼の有名な應仁の亂が起つて、久しい間京都は修羅の巷と變じて時々刻々に危險が身に逼つて來た。その大亂の始まる應仁元年には、一休は正に七十四歳であつたが、文明五年にその當の敵たる山名宗全、細川勝元の兩人とも死んだときが正に八十歳であつた。

應仁の亂

戰亂のために一休は他の人々と共に、近江から美濃へかけて暫らく避難して居つたが、漸く京部も靜謐になつたと云ふ頃には、大阪は住吉の社内に居つたと云ふので、哲梅その他二三人の者が早う御歸庵あるやうにと、態々迎ひに行くと、折惡く大和路見物に出かけられた後であつた。早速その跡を追うて紀州熊野路で追付き、眞珠庵へお伴れ申して來たので、一休も久方ぶりに住み馴れた眞珠庵の方丈に坐して、恙なき比叡、如意の靑嵐に對し、美くしい三十六峯夕景色を眺め、覺えず快心の微笑を漏らした。

眞珠庵

破れ籠に朽れ竹

一亭一客のお茶

一休禪師がお歸りになつたと云ふので、御機嫌伺ひに訪ぬる人が引きも切れない。當時、東山殿といはれた足利將軍義政は、政事を治め驕奢に長じ、華美に流れ、古器と云ふ古器、珍品と云ふ珍品は、價を惜まず買上げ、贅澤に贅澤を盡す放蕩三昧。一休は殊の外苦々しきことに思つて居つた。

折柄、東山殿からの使者が眞珠庵へ立つて、お茶を參らせたき故、明日御登營下されたいと申入れた。一休は快く承諾して、翌日定めの刻限に東山殿へ出頭した。義政の喜びは一方ならず、早速、書院に引いて謁見される。一休は相も變らぬ破法衣の雲水姿。義政は熟々と見上見下ろして「やア禪師、久々で御座つたのウ」「これは〳〵將軍家には御機嫌麗はしく、大慶に存じまする」「ウム余も禪師の壯健の體を見て滿足に思ふ……茶を參らせる」と、是れから義政公が御自身で一休を茶室に導き、一亭一客のお茶といふ鄭重の扱ひをされる。

座敷には天下の珍器珍什書畫骨董を處狹しとまで陳列し、將軍家自ら立つての御案内、「禪師、何うぢやな、皆相當の年數を經たもので、價も貴い物ぢや」「左樣で御座る……古いのが宜しければ、清水觀音の傍にある石地藏は餘程古いが如何」「それは可かぬ、茶席に石地藏は仕

古物の自慢

方がない」と笑ひつゝ、ズーウと列べられた品々を、此れは何、彼れは何と、古いもの自慢の様子、一休は聽いて「實は手前の處に後小松院より拜領したる天智天皇月見の筵。老子の杖。太公望の茶碗。この三つの品を持ち合せて居りますが、將軍家に於てこの様に御嗜好とあらば、献上したく存じますが」と云へば、義政公は「うむ夫れは重疊、まことに稀代の珍品。苦しからずば申受たい」との仰せに一休は、「併し將軍家に對し、只献上と申すも何となう心苦るしい次第故、何程にても御買取を願ひたい」「それは最と易いことぢや、何程にても望みにまかせて差遣はさう」と聽いて、一休は「そは辱なう存じます、然らば三千兩……」金には不自由のない將軍家のことであるから、二つの返事で「左様か、然らば明日金子を持たせて遣はす故、その者へ只今の三品を渡して呉れるやう」「承知いたしました」と一休の答。

側にゐた仁木、細川などの面々、何れも聽いて驚いた。一休は何うして今まで噂にも聽かなかつた左様な珍器を持つてゐらるゝかと怪しんだ、

さて翌日になると、將軍家から多勢の家臣が三千兩の宰領となつて、眞珠庵へ遣つて來て斯様〳〵と申込んだ。取次に出た哲梅は驚いて、早速、この旨を方丈に通ずると、一休は取騒ぐ

將軍義政の驕奢

様子もなく出て來て、先づ三千兩の黄金を改めて受取り、哲梅を伴れて裏へ行つた。

一休は裏の納屋へ行き、「これぢや〳〵」と云ひつゝ、破れ筵、一枚引摺り出し、次で破れ垣の朽さつた竹を引拔き、泥の付いたまゝにし、夫れから庫裏の方で古い毀けた猫椀と、都合三點取合せて之れを使者に渡した。使者は實に驚いた。大枚三千兩のお金を出して將軍家が御懇望の品と云ふので、ドンなものかと思つてゐたら、品もあらうに揃ひも揃つたものばかり。これは一休様、少々氣が狂れたなと呆れた。而してこんな物は迚も將軍家の前へは持つて行けないと、果はプン〳〵怒り出した。が、一休は「好いから持つて行け、直ぐ後から拙僧が行くから……」と云ふものだから、何時まで言ひ争つても詮ないこと、使のものは不精無精に夫れを持つて立歸つた。

義政公は「天智天皇月見の筵……さても〳〵稀代の珍品……使の者は未だ歸らぬか」と、早う見たさに氣を焦慮つて御座る。折柄、大德寺から歸つたと申上げると、苦しう無ない、早くこれへ持てとの仰せ。使の者は恐る〳〵右の三點を差出した。義政公は取る手遲しと見ればこは开も何物ぞ、破れ筵に朽され竹！　見る見る滿面、朱を灑ぎ、沸然として怒の聲荒らげ「何

庭前目がけて投げ付けた

一命は助けて遣はす

ッこれが月見の筵！」と云ひさま、庭前目がけて投げ付けた。使のものは元より斯くあるべしと恐れてゐたので、倍々恐縮して平蜘蛛の如く平服して何の言葉もない。

かゝる處へ、大徳寺一休禪師が見えられたとの知らせ。義政公は一休を見るや否や、ハッタと睨み「禪師、御坊は余を欺いたな、破れ筵や朽され竹、あれが天智天皇の月見の筵、老子の杖とは何事ぞ……餘人ならぬ御坊、一命は助け遣はす、重ねて登營罷りならぬ、退れッ」と大喝し、今や席を蹴つて立たうとする袂をしッかと捉へ、一休は言葉靜に「まアまアお靜かに……その御立腹は何事でござる。上は久しう驕奢に長じ給ひ、古器珍什には價を惜ませられぬ由、洽ねく奸商どもの知る處となり、勝手次第に造り事して、莫大の金銀を上より欺き居るを知り給はざるか……天智天皇の月見の筵、老子の杖、又は太公望の茶碗と申すも眞物と思へば眞物で通るのみならず、無ければ無いで事濟む贅澤品、その贅澤品に幾千兩と云ふ大金を惜しまぬとは何事で御座る……上には未だ御存知あるまじきも、都は長の戰亂にて人民は塗炭に苦しみ、剩へ此の山城の國には凶作、田に菜色なく、人に生氣なきの有樣、ともすれば一揆も起らむ樣子……　さゝ若しも左樣の事あつては天下の一大事と存じ、彼の三千兩の黃金は上より下し置かれたる旨篤と申含め、困窮せる農民一同へ直に下げ渡したり。願くは上にも下萬民に心を寄られ、いらざる驕奢を改めて、政治向に御賢慮を回らされなば、一休、縱へ登營相叶はぬのみか、この場に御手打相成るとも苦しからず……上、如何思召さるゝや」と、誠の言葉に、義政公も下俯いて何の言葉も無かつたが、思はず席を進め、一休の兩手を取て上に請じ、「義政、身不肖にして夫れとも知らず……重々の無禮、偏に御容赦下さるべし……御練言は膽に銘じて厚けなし、筵や杖は記念として大切に留め置くぞ」と申述ぶれば、一休ヒョイと頭を上げ「御入用ならばまだ幾らもございます」と笑つた。

これより義政公は驕奢を止められたと云ふが、併し義政が東山に別業を營み、金閣に倣つて銀閣、即ち今日の銀閣寺を建てたのは文明十一年で、一休示寂の二年前である。この時に義政はまだ四十四歲であつた。

將軍へ諫言

一〇　末期の一句

一休の病氣

文明十三年の春、一休は不圖、病の床に就いた。多くの弟子信者が集まつて醫藥看護に手を

定命も盡きかけた

鐘や太鼓を叩いて踊れ

阿彌陀如來と約束

盡したがドウも思はしくない。

或る日、一休は弟子信者を呼び寄せて、俄に病床の上に起き直り、「あ皆の衆能く來てお呉れた。拙衲も長の間、諸方を廻り、面白可笑しく世を渉つて來たが、もウ定命も盡きかけた。何を云ふも生肉の身體、それにお釈迦様よりも一割餘計に生きた。命あるものは喪び、咲くものは散るのは、元より定まる約束、生者必滅會者定離とはお釈迦様のお言葉ぢや、拙衲も此の冬はお暇乞ひするつもりぢや……就ては何か尋ねたい事があらば、今の中に何なりとも問くが好い。拙衲が瞑目したとて決して嘆いてはならぬ、何うぞ八宗九宗の人々を集め、鐘や太鼓を叩いて踊つてお呉れ、これだけは頼んで置く……實はな、昨夜、阿彌陀如來が拙衲の處へ來られて、何時來るつもりだと問はれたで、直ぐに行きたいが、行けばモウ歸つて來られなからうから、色々用事も片付けて置きたいから、モ暫時待つて貰ひたい、さうさナ冬の十一月二十一日に必ず行かうと約束したら、阿彌陀如來が、ではそれまで家を拵へて置くからと云つてゐた」と、さも氣樂さうに話した。

一同は聽いて吃驚、思はぬ言葉に互に顏を見合せて暫し默つてゐた。が、偶ま一番上座にゐた哲梅が、膝押し進めて、「禪師様、何を仰せられます。今、貴僧が御遷化になつては、私初め一同のものが誠に困ります、どうぞ左様の事を仰せられず、何時までも永くこの世にお留り下さつて、お世話下さるやうに……」と涙ながらに云へば、早や老の眼に涙を浮べて竺齋や紅甚も一緒に進み出で「禪師様、これは餘りお情ない、モウ私共も七十の坂を越えまして、身代は伜や嫁に讓り、至つて氣樂でございますが、今さら禪師様にお別れしては、何の樂しみも張合もございませぬ。何うぞモウ三四年の處を阿彌陀如來にお願ひなさつて、我々と共々に此の世にお留り下さるやうお縋り申します。それともドウしても此の冬、彌陀の淨土へ御出になりまするなれば、我々兩人もお召連れになりますやう、偏にお願申しひます」と、七十を越えた爺さん二人がおろ〳〵と聲立てゝ、子供が親に甘へるやうなことを云ひ、涙に曇る眼を拭いて一休の顏を見上げると、一休はカラ〳〵と笑ひ「そんな無理なことを云つても可かぬ。流るゝ谷川の水より疾く遷り變るがこの娑婆だ。世は皆無常ぢや……拙衲が今まで八十八年の間、爲たこと云つたこと、これをお前等が能く守り、能く行つて呉れたなら、拙衲はお前等と共に何時までもこの世に居るのぢや……」と懇々示した。その未後の句に

我々兩人も一緒に

末期の一句

朦々然而四十年。
朦々淡々八十年。

淡々然而四十年。
末後脱レ屎捧二梵天一。

柳不レ綠。花不レ紅。
喝

一休の眞面目

とある。屎を脱て梵天に捧ぐと云ふ一句が全く一休の眞面目であると共に、又これ禿僧の活機輪である。滔々たる人生は正に此の一句に盡きて居る。この外に何の求むることもない。猶ほ又

借りて物

かり置きし五つの物を四つかへし
本來空に今ぞもとづく

との歌もある。觀來れば一休八十八年の生涯は、元是れ地、水、火、風、空の五つのものゝ凝結で、長いか短いかだけの相違、尊いも卑しいも、富めると貧しきも、賢も不肖も、何れも同じ借り物。軈ては本來空にお返しするのだとの意。これ一休が本來もなきいにしへの我なれば

本來空とは何ぞや

死にゆくかたも何もかもなし

と歌つたのと對照して、更にその本來空とは何であるかと工夫しなければならぬ。更に又

はじめなくをはりもなきわがこゝろ
うまれ死するも空の空なり

生死とは何ぞや

とある。死すると云ふその死と、生れたと云ふその生と。生とが何ものぞ、死は何ものぞと商量一番しなければならぬ。而して一休は又、

國いづくさとはいかにと人とはゞ
本來無爲のものとこたへよ

本來無爲

と歌つた。本來無爲である。こゝが生れた國だ。こゝが生れた里だと云ふべきはない。その生れた里が無ければ、又た歸るべき處もない。茲に於て生と何、死とは何ぞと參禪しなければならぬ。

又た遺言狀の奥には、

一休の再來

我れ死して百年過ぎて後、唐土より禪師來らば我が再來と思へ。又た二百年に當る年、我が

屍を堀り出して見るべし、若し形朽たらば、云ひ置きし語は火中すべし。大方、死骸はそこねまじ

と書いてあつた。それから百年後は恰も天下麻の如く亂れ天正年中、而も信長が本能寺で光秀のため殺された頃である。次で秀吉は方廣寺に大佛を建立し、切支丹宗徒を追つたりなどしたが唐土からは禪師は來なかつた。その後七十餘年を經た承應三年、德川は三代將軍家光が逝くなつた四年目に、黃檗の開祖隱元が歸化して、禪風、一時に天下を風靡したので、これこそ一休の再來であると傳へられた。それから二百年に當る年と云へば、丁度寛文十年であるが、誰もその屍を堀り出すやうな氣持の惡いことは遣らなかつた。

禪僧の代表者

一休が死んでから、さッと四百五十年にもなる。この間には偉い僧侶も澤山出たが、一休ほど世間の人に好かれない。一休は全く古來の禪僧を代表して、平民的に社會的に知られて居る。それは其の行狀が頓智奇談に富んで居るからである。殊に日本人には滑稽趣味が頗る乏しいが、一休は稀れに見る滑稽學者である。若し日本の滑稽文學史を書く人があつたならば、一休は見逃すべからざる一人である。この天馬が空を驅けるやうな滑稽的奇才を思ふ存分に發揮して、世間離れのした禪宗の話を面白く說いたのが一休の愛嬌で、この點に於ては、正に古今第一流である。これが即ち今まで多くの信者を居て得る所以である。

世の中を斜に通つた男

一休は世の中を斜に通つた男である。何でも變つたことが好きであつた。決して涙の無い男ではないが、泣くより笑ふ方が好きであつた。その一代は、全く喜劇の一幕である。それだから理窟張つたことは大嫌ひ。若し傳說の一休を以て、直ちに我が修養の道案內とするものがあるならば、夫れは泣かぬことである。樂天的生涯を送ることである。世の中を馬鹿にして、むつかしく氣取らないで、而も罪の無い奇拔な生活をすることである。

修養の道案內

一休奇行錄——終——

—不許複製—

昭和十四年八月廿五日 印刷
昭和十四年八月三十日 發行
昭和十四年九月十日 再版

修養叢書
一休奇行錄
定價 一圓二十錢

著者 高橋竹迷

東京市神田區神保町一ノ三〇
發行兼印刷者 大谷德之助

東京市神田區神保町一ノ三〇
印刷所 大洋社印刷部

東京市神田區神保町一ノ三〇
發行所 大洋社出版部
振替東京五九〇二番

製本•大洋社製本部

大洋社版・激讃不朽の名作

小林雷里著	元祿快舉	赤穗義士傳	四六判	三二四頁	特價五拾錢
佐藤紅綠著	長篇小說	鳩の家 前篇	四六判	四三四頁	特價五拾錢
同	同	鳩の家 後篇	四六判	五四八頁	特價五拾錢
同	同	虎公 前篇	四六判	三三二頁	特價五拾錢
同	同	虎公 後篇	四六判	三八二頁	特價五拾錢
柳川春葉著	同	なさぬ仲 前篇	四六判	四六二頁	特價五拾錢
同	同	なさぬ仲 後篇	四六判	四七二頁	特價五拾錢
菊地幽芳著	同	月魄 全	四六判	六一二頁	特價五拾錢
曾我の家五郎	五郎傑作大集		四六判	七三〇頁	特價五拾錢
村上浪六作	浪六傑作大集		四六判	八〇〇頁	特價五拾錢

大洋社神話叢書！々嘖評好

藤澤衞彥著	日本神話と傳說	四六判	七八〇頁	特價五拾錢
松村武雄著	朝鮮台灣支那神話と傳說	四六判	五七〇頁	特價五拾錢
同	ドイツ神話と傳說	四六判	七〇〇頁	特價五拾錢
同	北歐神話と傳說	四六判	七八〇頁	特價五拾錢
中島孤島著	ギリシヤローマ神話と傳說	四六判	八三〇頁	特價五拾錢
同	イギリス神話と傳說	四六判	六六〇頁	特價五拾錢
同	エジプト・アッシリヤ・バビロン神話と傳說	四六判	八〇〇頁	特價五拾錢
山崎光子 松本竹二著	ベルギー・ハンガリー・オーストリヤ神話と傳說	四六判	八七〇頁	特價五拾錢
馬場吉信 松村武雄著	インドペルシヤ神話と傳說	四六判	七七〇頁	特價五拾錢
井上勇 曙夢著	フランスロシヤ神話と傳說	四六判	八三〇頁	特價五拾錢

大洋社版・最新刊評判工業名著

○菊地愼太郎先生編著・待望の最新刊！

斯界唯一完璧叢書

工業語機械用語辞典

金文字特製 定價 貳圓 特價五拾錢

工業界各方面から久しく熱望された機械に關する用語の英和新辭典、素晴しく便利、物すごい賣行、發賣即日初版賣切、再版既に殘部僅少、機械上の特殊語には一々かなを付す、本書一冊で仕事がすら〳〵と行く、本書一冊で日本工業は百歩前進する、ノミ一つ動かす者も備へよ。

菊地愼太郎著	最新	機械製圖入門	四六判 金文字特製 特價五拾錢
同	最新	旋盤工作入門	四六判 金文字特製 特價五拾錢
同	最新	機械仕上入門	四六判 金文字特製 特價五拾錢
同	最新	工業英語入門	四六判 金文字特製 特價五拾錢
同	最新	工業數學入門	四六判 金文字特製 特價五拾錢

滿天下渇仰の大洋社版辭典書

新語研究會編		便利重寶新語辭典	三六判五百頁 特價五拾錢
井土靈山編	和漢五名家	三體千字文集成	菊判線凸判美本 特價五拾錢
石川雅山編書		ペン字速成上達帖	菊判總凸判美本 特價五拾錢
畔上博著	現代	もの知り百科辭典	新四六判四八〇 特價五拾錢
新語研究會編		現代常識 新語辭典	菊半截四〇〇頁 特價五拾錢
高木尙介著		文章作る時は便利だ	菊判二五〇頁 特價五拾錢
同		書翰文講話及文範	菊判二一〇頁 特價五拾錢
商業學會編		商業書翰文の作り方	四六判三〇〇頁 特價五拾錢
大隈博誠著		名前の附け方手引	四六判三一〇頁 特價五拾錢
藤野梧桐著	一ヶ年應用	ペン手紙書き方	百科辭典 四六判三〇〇頁 特價五拾錢

絶對權威の大洋社版聖典

倉田白峰著	日本全國神社物語	四六判三三〇頁	特價五拾錢
中野松堂著	各宗各派佛教大觀	四六判二八〇頁	特價五拾錢
同	信仰生活大慈悲	四六判三四〇頁	特價五拾錢
新井石禪外釋宗濱	禪の修養とその妙味	四六判五九〇頁	特價五拾錢
松本青邨著	親鸞聖人の信仰と生涯	四六判四五〇頁	特價五拾錢
井上賢海著	法華經講話（平易に說いた）	四六判四七〇頁	特價五拾錢
道重大僧正著	人生を歩み行く道	四六判三九〇頁	特價五拾錢
星野武男著	日蓮の言葉（御文章講義）	四六判三四〇頁	特價五拾錢
間宮英宗著	禪とは是ぢや	四六判三一〇頁	特價五拾錢
小林白龍子著	地相家相大全（上卷 下卷）	菊判和綴特製本	各一册特價五拾錢

大洋社版不朽の美術名篇

圖案研究會編	美術ポスター（傑作大集）	菊判オフセット	特價五拾錢
福田久道譯	ミレーの藝術と生涯	四六判六二〇頁	特價五拾錢
福田久道編	ミレー畫集	菊判コロタイプ	特價五拾錢
書畫普及會編	趣味の書畫骨董	菊判三四〇頁	特價五拾錢
內村正雄著	水彩畫の新描き方	四六判二四〇頁	特價五拾錢
西川國夫編著	圖案文字大集（カタカナひらがな）	菊判オフセット	特價五拾錢
西川國夫編著	圖案文字大集（ローマ字數字）	菊判オフセット	特價五拾錢
西川國夫編著	最新實例圖案文字大集	菊判オフセット	特價五拾錢
永田喜健著	寫眞のうつし方入門	新四六判二五〇	特價五拾錢
田原豐著	滿蒙風俗大觀（大陸のシルベ）	四六判三五〇頁	特價五拾錢

萬朶香る大洋社版文學叢書

木本順次著	萬葉集手ほどき	四六判三〇〇頁 特價五拾錢
松村英一著	新釋萬葉集 上卷 下卷	新四六判四〇〇 各一册特價五拾錢
井上靈山著	新漢詩作法	新四六判二八〇 特價五拾錢
蘆花文集	自然と人生外十篇から	新四六判二八〇 特價五拾錢
碧梧桐編著	子規言行錄	四六判七四〇頁 特價五拾錢
內藤鳴雪著	俳句作り方味ひ方	新四六判三七〇 特價五拾錢
高濱虛子著	俳句入門	四六判二六〇頁 特價五拾錢
寒川泉骨著	季節句例 歲事記大觀	菊半截四九〇頁 特價五拾錢
松村英一著	現代短歌辭典	新四六函入美本 特價五拾錢
黑澤隆信著	一茶俳句研究	新四六判三一〇 特價五拾錢

396
23

終